



Servas Japan Tohoku

支部ニュース

No.83



支部長挨拶

トラベラー報告

寄稿1 「モンゴルへサーバス旅行」

寄稿2 「2013 フィジー親子留学報告」 他

寄稿3 「復旧と復興」

事務局から

支部長

M. H

M. A

M. T

M. O

S. M

M. O

Peace Secretary

事務局

TOHOKU

支部長挨拶

暑い夏も過ぎて、秋を楽しみたいです。

支部長

みなさんお元気ですか？すっかり秋らしくなってきましたね。暑い夏でした。

今回8月11日から12日にかけて、フランスのLご夫妻のホームステイを受け楽しいひと時を過ごしました。ご夫妻は、54歳の夫と58歳の奥様でした。ご長男が24歳で、現在フランスで将来の仕事を研究中で、まだ孫はいないということでした。今年の京都の支部長さんご一家以来のホストです。



わが家が、今回の彼らの旅のスタートでしたので、旅行記は、他の方に譲りますが、旅慣れたご夫妻でした。レンタカーを成田から調達して、夕方早めに到着し、里子のKにエッフェル塔のTシャツをプレゼントしてくれました。食事は、日本食を好き嫌いなく食べてくれました。手巻き寿司、そうめん、天ぷら、カレーライス、もちろパンも。

こちらでお連れしたところは、弥彦山スカイライン、大河津分水、寺泊、五合庵、国上寺、弥彦公園、T宅、弥彦神社でした。いつものコースですが、最後に13日の朝に孫の保育園送りとお墓参りを一緒にして、夏の行事を体験してから旅立ちました。

さて、夏休みは里子のスイミングや、兄弟、子供たちと孫の世話で終わりましたね。今度は次男も新潟に転職して来るようで、跡取りができるのではと期待しています。娘も自分の車を買って私の送迎も少なくなりました。秋は少しゆっくと楽しみたいです。

ところで、オリンピックが7年後になると、外国人が大勢来られるのでしょうか、ホームステイ先も多く必要になるのではないのでしょうか？若い方々と、新会員を増やして、楽しい東北支部にしていきたいですね。

トラベラー報告

◎ Lさん (オランダ) 4月20日～22日

M. S

東日本大震災の前年2010年5月に盛岡市のTさん、福島市のNさんが受入れました。同年9月、私と中山が彼女を訪問しお返しに受入れしてもらいました。

ライデイさんは首都アムステルダムで旅行会社を営

営。オランダ人を日本旅行へ送り出し、日本側はJTBがお客様を成田で受取る仕組みです。

Lさんは日本各地を訪ね、いわば商品開発をして来ました。ところが2011年の大震災、Lさんの会社は顧客ゼロになってしまいました。Lさんは東北Servas各位の身を案じてたびたび見舞いのメールを送ってくれました。

震災2年後の今年、会社再興に向け九州・沖縄を視察に来日、福島市に寄って下さいました。N氏、私と再会し無事を確認したかったようです。

我が家では、地震・津波のVideo映像 (NHK番組の録画) を熱心に見ていました。



◎ MさんとTさん (スウェーデン:ストックホルム) 8月7日～

M. A

サーバスのお客さまをお迎えするのは今回で三度目です。スウェーデンのストックホルムから、MさんとTさんが2泊3日の予定でお出でになりました。二人はお隣り同士で、これまで何度も一緒に外国旅行を楽しんでこられたそうです。今回が一番長い旅行で、「Japan rail pass」の3週間用を利用し、沖縄・九州・広島・京都・奈良と北上、8月7日の夕方わが家に到着されました。

猛暑の中をお出でになったので、お二人はすぐにシャワーを浴び、洗濯に取りかかりました。さっぱりした後で食事。



用意したものはすべて食べていただきました。これまでの経験から、肉を食べられるかどうかを事前にお聞きしておいたので、それが今回はとても役に立ちました。ヴェジタリアンの方がいたのですが、さしみ・いくらなど魚は何でもOK、特にしじみ汁は喜んでいただけました。わが家にホームステイ中のイタリア人留学生Vさんも途中から加わり、座がいつそう盛り上がりました。

二日目、松島へ。松島海岸駅に着き、タクシーの運転手さんに頼んで、湾内がよく見えるところ「西行戻の松公園」に案内してもらいました。そこで島々をバックに写真を撮り、船着き場に戻りました。瑞巖寺前の食堂で昼食を食べた後、遊覧船に乗って塩竈へ。Mさんは盛んにカメラのシャッターをきっておられました。

次に仙台七夕 (ちょうど最終日) をご案内しました。Tさんが驚いたのは七夕飾りよりもあまりの

人出の多さ。人混みは苦手ということで、長くは見物しませんでした。お二人が喜ばれたのは七夕よりもマネキンの着物姿。足袋にも興味を示され、買おうとされたのですが、外国人に合う大きいサイズはなく、残念だったようです。

早めに帰って夕食の準備。この日のメニューは「はっと（水とん）」です。日本全国を旅行されるお二人なので何か宮城ならではのものを一つと案を練り、前もって枝豆をつぶして用意しておきました。好みがあると思い、「ずんだばっと」のほかに夏野菜の「おつゆばっと」、それに「おいなりさん」も用意しました。Tさんが台所に椅子を持って来て料理のメモを取り始めたので、せっかくだから一緒に体験してもらうことにしました。おいなりさんのご飯詰めやはっとの摘み入れ方を手伝ってもらいました。Mさんはずんだばっとを、Tさんはおつゆばっとをお代わりされました。「小さい魚はもうありませんか？」とおっしゃっていたので煮干しの旨味が気に入られたようでした。

三日目の朝、私たちが起きたときにはもうすでに荷物が玄関のところに並べられてありました。本当に旅慣れていらっしゃる。よい天気でしたが、荷物が重いので地下鉄の泉中央駅まで夫が車でお送りし、しばらくほっとしていたところ、午後北海道の次のホストの方から電話があり、北海道は大雨で列車が止まっているとの情報！でも連絡の取りようがありません。(彼女たちはケータイを持っていません。)次の日そのホストのお宅に電話をして確認したところ、結局青森の列車の中で一晩過ごされたということでした。天気予報のチェックなどまだまだ配慮が足りないところがあったなと反省させられました。お迎えするたびに学ぶことがあります。

◎ LさんとFさん（フランス）

M. T

花の都パリ（ずいぶんと古い表現ですね）からLさん（54才）と奥さんのFさん（58才）が、8月15日16日の二日間来ました。当初18日19日を予定していたのですが、15日に町の盆踊りがあると連絡したら、是非盆踊りに合わせて来たいとの返事で決まった。11日と12日は新潟の支部長宅に泊まれ、次が我が家、このあと24日まで日本に滞在。Rさんは1986年の1年間日本で仕事をしてきた関係で日本各地を訪れたが、東北は今回が初めて。東北のサーバスホスト何人かに連絡したが、忙しい時期であったり旅行中で2戸だけの滞在となり他の日はホテル宿泊とのこと。全行程レンタカーで走行、暑さも手伝いかなりバテルのではないかと心配。東日本大震災の話になり被災地見学に行くことになり石巻を訪問。二人とも感慨無量で津波被災地に立ちつくしていた。福島原発事故も含め現在の復旧・復興状況等について夜遅くなるまで話は尽きなかった。もちろん、盆踊りを汗びっしょりで踊ったり、玉こんにやくやヤキトリ、焼きそば、お好み焼きに舌鼓を打ったり、ひまわり畑を散歩したり、ハスの花の咲く沼を船で遊覧したりして日本の盆を満喫してくれたことと思う。我々夫婦も久しぶりに楽しんだ。17日の早朝、次の目的地の鳴子温泉、平泉へと向かっていった。

PS: 東日本大震災後、はじめてのゲストでした。立て続けに2組からメールがあったが、1組は都合が合わず断念。地震や放射能の危険が少なくなったと感じ始めたのか、円安で旅行費が安



くなったからか！ もっともっと沢山の方々に来日してほしいと考える日々です。

伊豆沼のハスに囲まれて



石巻日和山から被災地を見て



寄稿 1

「モンゴルへサーバス旅行」

S. M



8月31－9月7日 5年振り2度目のモンゴルに行って来ました。モンゴル・サーバスのただ一人の会員であるHさんとはこの5年間交流を深めてきました。今回は多くのサプライズが用意されていて、貴重な体験をさせていただきましたが、過酷な自然の中での生活でもあり疲労困憊して帰国することになりました。

ほとんど信号がなく人々が道路を横断する姿は命がけのように見える、車のあふれているウランバートルの街と首都から遠く離れたフブスグル湖での遊牧民との生活と分けて書いてみます。

モンゴル語で「モンゴル」

「文部省で表彰式」

2013年2月発行の支部ニュース81号に「モンゴルの学校に備品配布が終わり大喜びの子供たちの写真が届きました」の題でヒングさんからの寄稿が載っていますのでお読みいただいていることと思います。

表彰される夫 モンゴル文部省にて



【9月2日】 Hさんが文部科学省調査部主任の役職にあるからでしょう、二つの小学校を訪問することができました。午前は私立の小学校、午後は公立の小学校でした。この日はモンゴルでは始業式にあたり街中は盛装した人々で華やいでいました。日本と反対で子どもの数が増えて学校の数が足りない深刻な問題を抱えています。3ヶ月の長い夏休みを終えて、久々に始まる学校生活に期待を膨らませ、心待ちにしている親子の姿を見ることができました。親子とも盛装して、その中で女の子たちが白い大きなリボンをつけているのが印象的でした。始業式で、夫と私は丁重に来賓席に招かれ、その上校長からは日本から贈った楽器にたいしての謝辞を受け、喜びながらも大いに戸惑いました。中古の楽器を贈ったという気持ちが心に引っ掛かります。

【9月3日】 モンゴル・文部省の訪問をしました。

この日はとても大きなサプライズが用意されていました。文部省の大ホールでコンサートが開かれるので来て欲しいというもので私たちは軽く考えて出かけて行きました。

舞台の中央にはピカピカに磨き上げられたグランドピアノが置いてありました。日本から贈った

あのグランドピアノでした。目の前に神々しく置かれているグランド・ピアノに圧倒され、さらに多くの関係者が、音楽を勉強する学生たちが大勢集まっていたことに驚きました。テレビ報道のカメラも準備されていました。

モンゴルで有名なピアニストが5人演奏してくれました。たちですがここに十分に響きました。貰い手がなく廃棄の運命にあったあのピアノが人々の心に美しい調べを与えてくれ、幸運のピアノに替わったことを実感した幸せな一日でした。

ピアノ演奏についての知識には疎い私



「フブスグル湖と遊牧民生活」

【9月4日～6日】 ウランバートルからフブスグルまでは約700キロ。飛行機1時間とRV車で3時間もかかるモンゴルで一番の景勝地フブスグル湖に行きました。

Hさんの遊牧民の友人が空港で待っていてくれて、3日間私たちのために運転手をしてくださったこともサプライズの一つでした。ウランバートルの街にいと車の排気ガスで咽がすぐ痛くなるのに閉口していたのに、この3日間はどこまでも続く青空、澄み切った空気、満天の星を堪能することができました。

観光客もほぼ去ってしまった9月のモンゴル草原だったけれど、まだ青々とした牧草が残っていました。馬や牛、ヤクさらに羊とヤギが放牧されている道なき道のところを走ることができ、クラクションを鳴らさないで動かない動物も多く、のんびりした時間が過ぎて行きました。

フブスグル湖周辺は工業化・都市化が進んでいないし、モンゴルの北、ロシアとの国境近くに位置しているため透明度は保たれていて中央アジアで2番目に大きな湖だそうです。

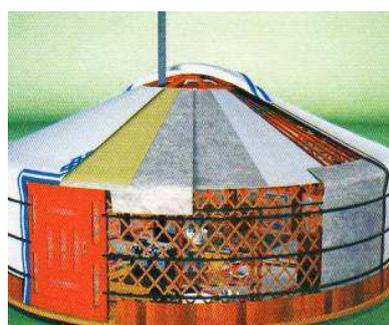
最後の3日目、運転手をしてくださった遊牧民の男性の家に招いていただいた。

観光地のゲルと違って遊牧民の生活を肌で感じることができ、貴重な体験となりました。

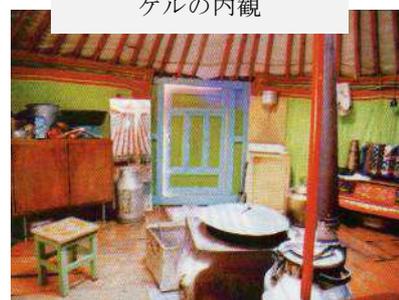
馬、牛、ヤクの乳から採れる数々の乳製品、乳茶、馬乳酒、ヨーグルト、アーロール初めての味で戸惑うも、モンゴル訪問が2回目ということもあって何とか食べてみました。

困ったのはトイレ、ゲルから

300メートルと離れたところにあり、手を洗う小川は更に200メートルのところとありと不便なものでした。帰国してつくづく想うのは本物の遊牧民と彼らの大切なゲルでの生活を過酷な体験だったけれど忘れられない思い出になったと云うことです。モンゴル語の分からない私たちが広大な高原で快適な旅を続けられたのもHさんの妹のSさんが通訳をしてくれたおかげです。サーバスを通して広がって行く交友関係に感謝です。



ゲルの外観



ゲルの内観

寄稿 2

「2013年フィジー親子留学報告」

M. O

7月25日(木)～8月21日(水)

息子を外国の小学校へ入れてみたい。それが、親子留学を思い立った動機だった。ちなみに私も今まで語学留学というものをしたことがなかったので、どういふものか見てみたいという気持ちもあった。今まで留学と言う形をとったことがなかったのは、語学なんてお金をかけて学ぶものではないと



いう考えがあったからだ。反面、自分のレベルの学習者が果たして学べるのかという疑問もあった。留学費だって安くはない。主人は主人で、フィジーの治安の悪さやインフラの不整備や病気や不衛生さなどの不安要素だけを並べ立てて、こちらの不安を仰ぎまくる。そんな様々な不安と疑問と期待を抱えての親子留学だった。近年、フィジーは語学留学先として人気急騰している。その理由が、留学費用の安さだということだった。フィジーにはもともと島に住むフィジー人と、後に移民してきたインド人がほぼ6：4

の割合で住んでいる。言語はフィジー人がフィジー語を、インド人がヒンズー語を母語とするが、小学校入学と同時に英語で授業が行われる。よって、家庭ではそれぞれの言語が使われているが、町では普通に英語が使われている。それで、子供を地元の小学校に通わせ、その間、親が英語の授業を受けるという形の留学を扱う会社が増えてきている。Servas Internationalのホームページに各国の会員数の表が載っている。フィジーにメンバーがいるかと思い、見てみたが、連絡先のメールアドレスがあるにもかかわらず、人数の欄には横線が引いてあった。恐らく、以前は会員がいたのだろうが、近年急増する日本からの留学生を受け入れるホストファミリーの開拓が盛んで、どうせ受け入れるなら収入になった方がいいということで、Servasを退会してしまったのではないかと、というのはあくまでも予想ですが・・・、大いにありがちな理由ではないかと思う。何しろ、留学生を1人受け入れると、1か月分の給料に相当する収入があるらしいのだ。

結論を言うと、恐らく語学留学と言う形をとることはもうないだろう。それは、支払った金額に得たものが見合っていないと思うからだ。息子も3週間何をしていたのか甚だ疑わしい。私も実際に体験して、語学留学は上級者がすることではないと痛感した。ホームステイで受け入れてくれる人たちもお金のためにやっているのだと思うと、何だか空しい。留学などしなくても、Servasの会員として世界中の人たちと交流を持つことができる。その方がよほど勉強になると思った。フィジーどうだった?と訊かれれば、色々あったけど楽しかった、と答えるだろう。海はものすごくきれいだし、息子とパラセーリングもしたし、スノーケリングもしたし、他の滞在者と仲良くなって一緒にいろんな所へ行った。でも、その「楽しい」はリゾートアクティビティーで、リゾートというものは、世界どこでも同じである。フィジーでなくともできるのだ。息子は他の滞在者と仲良くなって、とても楽しそうだった。しかし、それもフィジーだからではなく、どこも旅行先でも、世界中の旅行者が集まる宿に泊まれば同じ経験ができるだろう。にわかに沸騰してきた日本人相手の語学留学施設、私は日本人が文句

も言わずにお金を落として行ってくれる鴨と見なされている感をどうしても拭いきれなかった。



「P, U and E (Austria)」ホームステイ 9月2日(月)～9月4日(水)

M. O

P 44歳、U 49歳、どちらも学校の教師だ、E 7歳、我が家と年齢層も家族構成も似ている。「今、小学校は休みなの？」と尋ねると、彼らは1年間のホリデーにあって、その間自分たちでEに教えなければいけないんだ、と言った。1年！ 今まで何度もヨーロッパからのトラベラーを受け入れ、その度に、ヨーロッパの休暇は長くていいな、と感じていたが、今回の1年は過去最長だ。日本に10週間、その後いったんオーストリアへ戻り、そこから今度は大好きなトルコへ、そして、イタリアからクルーズ船でアルゼンチンまで2ヶ月の船旅、それから南米を旅行して回る予定だそうだ。1年後、オーストリアへ帰ったら、小学校で進級テストがあり、それに合格しないとまた2年生をやり直ししなければならないらしい。まだ、Servasのメンバーではないが、Servasの精神を理解し、すでに十分メンバーになる資格のある家族だ。今回の滞在は、私の仕事の締め切り直前だったため、彼らを案内する時間の余裕がなかったので、彼らは自分たちでループバスに乗って、仙台市内を見物した。Eはものすごく内気で、話しかけてもなかなかあいさつもしてくれないほど内気だった。どうしたらコミュニケーションとれるかな…と思い、「犬は何て鳴くの？」「豚は何て鳴くの？」と問いかけると”woof woof”, “oink oink”と答えてくれた。それで、今度は息子に「日本語では？」と聞くと「ワンワン」「ブーブー」と返ってくる。このオノマトペの違いが以外に面白くて盛り上がる。一緒に行った回転寿司屋では、空揚げとかフライドポテトとかばかり食べていた。やはり、ヨーロッパと日本の食文化の違いは、小さな子どもがすぐに順応するには大き過ぎるのかもしれない。家を出したのもあまり食べなかった。去年ドイツへ行った時も、息子が食事を食べないので困った。彼らは台風の進行方向に逆らって京都へ行き、それから南下して奄美大島へ行くと言って旅立った。いい人たちでした。



寄稿 3

「復旧と復興」

Peace Secretary

被災地の復興が遅れているという記事はよく見ます。それでは復旧は終わったのかと考えてしまう。この頃ようやくマスコミでも

「復旧もできないままに復興を叫ぶ」矛盾を指摘していました。

思い出してみると、被災直後は、生活の確保と生命の保全を前提に避難所で暮らしていました。小学校や中学校の体育館に、着の身着のまま逃げてきた人々は、不便ながらも最低の衣・食・住を確保した生活ができました・・・。

しかし中学校の体育館に300～500名の人々が譲り合っても家族の居場所は畳二枚程度。しかも3月中は自衛隊が運ぶおにぎりが主の食事。自分が食べたいものも食べられない状況が続いて、そのうち芸能人による炊き出しが流行のようにはじまり、NPOによる炊き出しも増えました。それでも持ってきてくれる側の得意な食事が多くなって、避難所の栄養状態が心配でした。何しろ、栄養士の派遣などは全くなかったからです。

5月末には仮設住宅のくじ引き。子供や高齢者が家族にいてもいなくてもくじ引き。それが平等だという行政の逃げ口上としか思えない説明に唖然としました。

栄養状態に注意をという厚生大臣のメッセージがニュースで流れてもなお栄養士派遣まで至りませんでした。栄養士協会側はとりあえず健康調査に派遣をしたものの、行政はだんまり。この行政のやる気の無さにまたまた唖然とさせられました。助かった命が大事に思われていない現実がっかりしました。

中学校の校庭の仮設住宅にはエアコンが付き。体育館の避難所ではウチワ・・・大きな室外機付きのエアコンも音が大きすぎて夜中にはストップ。

それから一年。大きな規模の仮設には支援物資が届くが、小さな規模のところは忘れられてしまい、みなし仮設は完全に支援から除外されてしまった。

震災から一か月経過した4月後半に、行政が支援物資の送付お断りを全国に発信しましたが、実際

は、物資の仕分けがうまくできなかつたのです。だから届けることのできなかつた物資が被災地の集積所にあふれてしまった。だから受け入れを断念しただけなのです。それを隠すために意欲のあるお届けボランティアもお断りしたし「物資は足りています」から・・・とニュースにも流したのです。

おまけに復旧と復興は密接につながると信じて疑わない行政は、被災直後から一部業者のために漁業特区申請の画策を二年もつづけたため、毎日の生活に必要な地盤沈下した護岸工事すら手を付けずに今に至ってしまった。

また防災スーパー堤防の議論に夢中になったため、堤防のかさ上げの高さが決まらないうちは、国道整備も商店の土地確保も棚上げになってしまった。いまだにJRの復旧ができない地域が多くあるのは、リニアモーターの開発と新幹線の開発の陰に採算の合わない赤字路線への投資をできるだけ先に延ばしたい姿が見え隠れしてならないのです。

これらは、みな復旧（・・・ライフラインや生活をもとのレベルまで戻す）ことと、生活の上に成り立つ生産活動を活力ある姿にして発展を促す復興とをいっしょくたに考えているからなのです。まずは被災者の身になって復旧を考えるべきで、災害公営住宅に2年半もかけているべきではないのです。学校建設など着工から1年で授業開始できるくらい技術力の高い日本なのです。7年もたてば大きな競技場がいくつもできてオリンピックに間に合わせられる日本なのです。

そこで、私の復旧への取り組みについて、皆様のご協力をお願いします。

- ◎ 手芸クラブの皆様には布地の協力をお願いします。エプロンなどを作って販売していますので、適した布地をお持ちの方はご協力ください
- ◎ 2～3年後に完成する集団移転団地への水仙球根の栽培を庭やお近くで畑などで協力ください。場所がない方は私まで球根をお送りください。こちらで栽培し増やして、団地完成時に持参します。
- ◎ ワカメの生産を始めたグループを支援してください。こちらは直接申し込みください。目標は一万袋です。

東日本大震災の後、一艘だけ残った船のもと、わかめ業の再開を決意した漁師4人が集まり、「蔵内之芽組」を立ち上げました。現在は5人で活動しています。



〒988-0325 宮城県気仙沼市本吉町蔵内14-4
TEL・FAX 0226-42-4147 E-mail: koiwakame@gmail.com

- ◎ 気仙沼地区、石巻地区への訪問をお考えの方。事前にお知らせください。語り部を紹介します。まだ宿泊場所も流されている地域は多く、平日はいっぱい日曜祝日は作業がないために、逆に宿泊予約が取れる場合があります。人数が多ければチャーターバスも可能です。

(以下は会員のみ内容です・・・会員は会員専用HPでご覧ください)

非会員で会にお入りになりたい方は最寄りの支部までご連絡ください)

事務局から

- ① 「東海北陸支部2013秋の例会」への参加について、詳細は東北支部事務局まで
- ② 会報の投稿をお待ちしております
 ※お馴染み高村光太郎の「智恵子抄」の一節に「・・・ここはあなたの生れたふるさと」にあるように、サーバスホストはトラベラーに自分の生まれたところ、住んでいる地域を紹介することに大きな意味があると思います。ホストリストには自分の趣味などほんの少しのことしか紹介していませんが、自分の住んでいる地域を積極的に紹介することがホストとして大切なことであるに違いありません。原稿内容は自由です。国内旅行で楽しかったところ、ツーリングで面白かったところ、ご近所の名所旧跡など、伝えたい身近な文化や随想などをお寄せ下さい。新しい発想が新たなサーバス活動につながることを期待しております。そして、サーバスならではのホスピタリティにつながることを期待しております。